

## イバン・イリイチの思想と教育

佐々木 正昭

イリイチによれば現代産業社会の道具手段 (tools) としての学校、交通、医療等の諸制度は限らない拡大と成長を価値として過去一五〇年の間に二つの分水界を通過してきている。第一の分水界とは新しい発明、発見、知識が顕在化している問題の解決を促進し、科学的な測定尺度がその効率の説明に使用されることによって社会に新しい習慣と道具の使用が広まる時期である。第二分水界とはこのように実証された「進歩」が価値と見做され、制度の確立を通して社会の搾取の基準とされ始める時期である。それは他律的な生産様式が自律的な生産様式を凌駕する決定的な分岐点である。あらゆる制度は第二分水界に向うとき極めて操作的な性格を帯び始め、これを越えると制度自体に権力が集中し、専門家による素人の統制が強まり、人間は自ら行為することよりも商品を得ること、サービスを受けそれを消費することに慣らされるのである。即ち制度が第二分水界を越えることによって制度は搾取、管理の道具と化し、それに伴って反生産性と規格化、人間の制度への依存の強化と不能化が進み「超資本主義」とでもいうべき現代資本主義が変貌した「消費社会」が出現するのである。いわゆる「先進国」においては過去一〇年間に主要な制度が相補的に第二分水界を越えたというのがイリイチの認識である。彼はこのような制度の過剰成長は人間存在を成立させている諸均衡を崩壊させており、それは究極的には人間の生存への脅威であるとし

て次の五領域から分析する。(一)生物学的退化 人口過剰、過度の豊かさ、科学技術の誤用の三要素による環境破壊の結果、人間の進化過程を育んできたものが阻まれ生命体としての人間の活力が低下する。(二)根源的独占 制度の確立が少数の専門家とそれに支配される多数の素人という社会の二分化を産む。これは「専門家帝國主義」であり、制度が提示する価値以外の選択の否定、制度の産み出す商品、サービスの強制的消費、制度依存の強化、自律の制限を個人に課す。(三)過度の組織化 高度に資本主義化された道具手段は高度に資本主義化された人間を必要とする。新しい道具手段の操作と共生を必要とする消費社会に適応するためには、個人は絶えず教化、社会化、正常化されなければならない。これは組織的な教育を学校に期待する強い要求となるが、消費社会への正常化の過程としての教育の組織化は過剰とならざるを得ず、教育は消費されるべき商品と化し、学校という制度と結合して選別の道具になる。過度の組織化により人々は適応することのみ教化され想像力を失っていく。(四)両極化 制度的に産み出された価値の集中は一部の特権者と多数の消費者という二分化された社会を産み出す。持つ者と持たざる者との格差が拡大すること、生活水準の上昇が独占によって生じた商品を必需品と化すこと、これが決して貧しくはないのに人々の欠乏感に拍車をかける「現代の貧困」が出現させる。(五)旧式化 絶えず新しくすることは進歩の思想と結びついて産業的生産様式に内在する。絶えず新しいものを産み出しそれを必需品にするためには常にその市場が必要である。市場の生産と拡大の最も効果的な方法は新しいものと特権とを合致させることである。この合致が成功すれば旧式のものとは価値が下がり、消費者の私欲は無限に進む消費の思想と結合する。

個人は自己の所有物の新しさの度合に応じて社会に階級づけられるのである。旧式化の強制は社会の両極化の促進、絶えざる貧困の更新、消費のための不断の再教育を産む。これは究極的には言語、神話、道徳等の人間の伝統の棄却に繋がる。

イリイチはこれらの多面的均衡を求めるために過剰に成長した制度に対し限界を設定することを提案する。その限界は生存、正義、自ら選択した労働という三つの価値を基礎とした政治転換であるが、これは次の点を根拠にする。(一)自然の制御は自然が人間にとって有用である範囲内に留めるべきである。(二)制度は人間の自律行為を犯す非人間的なものにならぬ限り有効に機能する。(三)教授に際しては特別な授業計画が自立した学習の機会を阻害しないことが必要である。(四)社会における移動は少数の特権階級を作らぬようにすべきである。(五)変革の度合は伝統を崩壊させぬこと、それが十分意味があること、安全である保障がある範囲内に留めるべきである。以上の均衡の回復した社会をイリイチはconvivial societyと呼ぶ。産業社会が生産性を価値とするのに対しこの社会はconvivialityを価値とする。これは人間相互の自律的、創造的交わりと人間と環境との交わりを意味するものであり、他人や人為的な環境が強い要求に人々が条件づけられた反応を示すのとは対照をなすものである。convivialityは人間の相互依存の中で実現される個人の自由であり、それ自体本質的な倫理的価値なのである。convivial societyの実現は人間の生存を脅しつつある現代産業社会の現況を深く見極め得る目覚めた者が専門技術官僚に対して効果的な限界を設定することにある。我々はこの目覚めた者の列に加わるために諸制度に対する意識を根本から変えなければならぬ。それは究極的には論理の問題ではなくいかな

る生活様式即ちいかなる生を選ぶかという決意の問題なのである。

さて、イリイチの教育観であるが、彼は教育をキリスト教の基盤に立つ儀式と捉える。即ち原罪を原愚と置き換えることにより、望ましい知識の欠如という仮説が生まれ、それが万人に長期に渡って精神的サービスを施すという教会的発想と結合して人間の原愚は公的に組織された制度を介在させなければ贖われぬという教義に発展してきた。この制度が学校教育だというのである。彼にとつては「教育」そのものが近代の構造的産物、発明物であり、歴史の一時期に出現した組織なのである。彼はその原型をコモニウスの思想にみる。コモニウスは学校を「万人に万物をしかも徹底的に伝える」装置として描き最初に七〜十二年の義務教育を提唱した。だがそれは知識を流れ作業生産するための青写真の輪郭を示したもので錬金術そのものであり、初期産業資本家の好個の道具になったとイリイチは見做すのである。産業的生産様式は「教育」という新しい見えざる商品を作製することによって初めて十分に合理化された。人為的な社会に適応していく新しい型の人間を産出することへの要求が学習と学校化(schooling)を同一のものとし、学校を現代産業社会になくしてはならぬものにしたのである。学校化とは学校の制度自体に内在する影のカリキュラム(hidden curriculum)を通して人々を現代産業社会に適応させることであり、人々はこれによって産業社会での時間、消費、従順さ、段階的昇進等の価値、教育を多く消費する程社会で多くの特権を獲得すること、教育消費の度合に応じて自己の社会的地位を容認すること、健康や教育等の不可視なものでも制度によって産み出されれば価値があること等を学ぶのである。かくして人々は学習は教授の結果であり、学校内で学んだことにのみ価値があり、

学校を通過することなしには社会の成員たり得ない、と教えられ  
る。学校はまさに現代産業社会の神話が集約的に表象されている  
制度であり、(一)社会の神話の貯蔵庫、(二)神話のもつ矛盾の制度化、  
(三)神話と現実のずれを再生産し、隠蔽する儀礼の場所としての三  
つの宗教的儀式を果しつつ、産業社会における加入儀礼を合理化、  
神秘化、制度化して消費社会を再生産し続ける役割を果している  
のである。それは個々の教師の良心的で誠実な教育実践をもって  
しても克服することのできぬ制度自体のもつ強大な機能であり、  
多元的均衡のすべての次元に構造的に関わっているのである。イ  
リイチはこのような教育、学校観に立って自律的な学習の蘇生を  
説く。それは人々を教育を専門とする制度に強制的に収容するの  
ではなく、すべての人々を教育的に活動させることによってのみ  
国民文化が形成され得るという視座からであり、教育は生活と労  
働の中で行われるべきものであって人間は人格的に対等な立場に  
さえ立てば不断に相互に学び合い、驚きを与え合うことができる  
という見地なのである。convivial society においては教育は不  
要なものとなる、とイリイチは言うのである。

イリイチは現代産業社会を制度的視座から分析し、科学技術進  
歩の査証のモデルとして学校、交通、医療を選んだ。これは一見  
形態上からは何ら関係がないように見えるが、その実、学校化、  
加速化、医療化という現代産業社会制度の様式を示す産業化のパ  
ラダイムであり、主義、体制、先進国、後進国の別なくこの産業  
化のパラダイムに代表される進歩と消費の神話が価値として容認  
されていることをイリイチは指摘したのである。既述の如く *schooling*  
とは学校のみならず、産業社会全体を貫く制度的価値へ  
の適応を教化、条件づけることである。従って *deschooling* とは

制度の *hidden curriculum* によって意識の内実まで犯され、商  
品とサービスへの耽溺と羨望の奴隷と化し、制度依存を強め、希  
望を期待と置き換え、想像力と創造力を枯渇させている我々の自  
律行為復権への自覚を促す認識活動として把握されなければなら  
なかったのである。彼は現在では *teschooling* という醜い語——  
造語の過程で性的な語が基礎になっている——を作り出したこと、  
それが「商品」として広まったことを恥じており、最近では *tes-*  
*chooling* よりも消費社会という回路からの脱出という意味合いで  
*unplugging* (プラグを抜く) という語を使っている。ともあれイ  
リイチは現代産業社会解明の鍵として *schooling* という概念を抽  
出したのであって、*Deschooling Society* (一九七一年) を書い  
た時の力点は *deschooling* よりも *schooling* にあったとみるべ  
きであろう。イリイチは我国へはイアン・リスターの *Deschooling*  
(一九七四年) を通して「脱学校論者」として紹介され、イリイ  
チの著作も *deschooling* という用語も十分検討されぬまま *tes-*  
*chooling* 及び「脱学校(論)」という言葉のみがセンセーショナ  
ルに飛交ったため、イリイチ自体も彼の思想も様々な誤解、曲解  
的はずれな批判を受けたが、彼は教育学的な意味では教育や学校  
には全く関心がないといつてよい。脱学校論が教育、学校の枠内  
での議論に終始するのに対し、イリイチの眼は広く現代産業社会  
に向けられており、関心は社会における科学・技術と権力との条  
件を人間存在のあり方を基点に問う所にあるのである。最近、イ  
リイチは教育を歴史的に捉えようとしている。彼は三世紀にすで  
に教会の基盤の上に教育が制度化されたと考え、一九四二年のネ  
ブリハの標準語の制定つまり母国語教育による方言廃止を管理さ  
れた話し言葉の義務化による vernacular な(その土地固有の)

言語や価値を侵害するものとし、コメニウスの思想を錬金術だと言いつ、homo educandus(教育されるべき人間)即ち教育の欠如した人間という概念は近代のものであって、それは近世と共に終りを告げるであろうとし、現代の情況のために教育するのは一種の暴力であり、教育への尊重をなくし、教育は経験に照して二義的なものとなるべきだとする。ここでみられるようにイリイチのいう「教育」とはあくまでも制度化された義務的閉鎖的な学校のことであり、それが歴史と社会の文脈における現象として把握され、カリキュア化されていることに気付く必要がある。子育て等の人間の生存、存続に関わることや文化遺産の継承発展等は彼にとつては何も制度化した学校を必要とするのではなく、これらは彼の「教育」の範疇外のことなのである。ブラジルの識字教育実践家パウロ・フレイレとの対話や(一九七四年、邦訳一九八〇年)や『人類の希望』(一九八一年)における現場教師の質問に対する返答が決定的にすれ違っているのも、「教育」の概念の差異を踏まえぬまま議論がなされていることに起因するのである。イリイチは決して昔に返れというアナクロニズムや、ユトピーア

を提示しているのではない。彼はますます肥大化しつつある制度によって人間の生存が官僚的支配によって一元的に管理されつつあることに警告を発し、現代産業社会における我々の位置と我々が為すべきことに大きな示唆を与えているのである。最近のバク・ス・エコノミカ(経済平和)と民衆の平和の対置、サブスタンスやヴァナキュラーな(土地固有の)価値の強調、伝統的な経済学が対象からはずしてきた unpaid work となりわけ shadow work (影の仕事)の分析等々の仕事は Celebration of Awareness — A Call for Institutional Revolution (一九七一年)「自覚を祝す——制度革命への呼びかけ」に始まる一連の著作の延長線上にその問題意識があることは明白である。イリイチは一九八〇年のドイツ教育学会に招かれ招待講演をした。その中で彼は、「もっとと教育を！」という要求に対して「ナイン・ダンケ！」(いや、もうけっこう!)というのが私の思想だ、と語っている。教育学は彼の思想をいかに受けとめ、いかに批判的に超克し得るかという大きな挑戦を受けているのである。